

農の行為に関する考察

乗 本 秀 樹

一 はじめに

生命の糧の獲得に汲々とした時代。「農は国の基なり」の時代。——農に対する眼差しは偏執的であり続けた。そして、高い農業生産力が実現されたこの時代においても、依然偏執的である。農畜産物価格の高低だけを見る、食品としての安全性だけに過敏にこだわる、きつい・汚い・危険ということで農に纏わることがらを忌避するなどの態度がそれである。

楽観的な願いかもしれないが、人類史上で農業に比較的気を措いて掛かれるこの時代に、もっとゆったりとした人間と農業の関係が見い出せないものか。——おりしも、技術合理的な生活観だけでは掬いきれないことがらを際立たせながら、行為の様式をめぐる議論が多彩に展開されている。そうした議論にも洗われながら、「農」を基調とする生き方を確認してみてもどうだろうか。この努力は、農業に従事している人々にとっても、農業・農村には無縁だと思い込んでいる人々にとっても、大切なことではないか。

こうした動機に導かれて、既に二つの考察を試みた。

第一に、農村に暮らし農業に従事し続ける女性の農業観の展開を見ることにより、「農業に従事する人々が自身の感じ方や考え方を時間をか

けて醸成してゆく」事実を確認した¹⁾。そこでの考察からは、次のような視座が展望される。

A 「快」であれ「美」であれ、「本質的価値」であれ「手段的価値」であれ、主観的な価値目標の内容と基準は予め与えられるのではなく、真摯で生き生きとした営みのなかで醸成されるのだ。

B 生活の内に展開する物や自然はさまざまな意味を帯び伴っており、豊かな感受性でそれを感じ取ることができるのだ。

C イデオロギーとして与えられる場でもない、個に還元し尽くされる場でもない、共同主観を湛える共働の場を維持し展開することができるのだ。

D 身体的な経験が持続されるうちに、新しい感慨や意欲がさまざまに湧き起ってくるものだ。

第二に、農業者の努力の方向に影響を与えてきた農業経営学と家政学の方法を点検し、農業者を実存として理解するための姿勢と理論枠組みが備わっていないことを指摘した²⁾。行為や生活を見る際のカテゴリーが次のようなシステムの目的合理性に支配されているため、農業や農村生活の営みを十全に捉えられないのである。

a 生活の場の目標が個人の目標にすりかえられてしまう。

b 健康・安全・快適・平等・創造的などの理念的な性質の目標が掲げ

られるにとどまり、農業や農村生活を支え導く価値目標が形成される具体的な過程に関心が向けられない。

c 場に展開する財・サービスや自然の意味が、科学的に把握可能な「使用価値」だけに限定されがちである。

d 実、「場」という発想自体が備わっていない。人々の共働が果たす意義や共同主観には関心が向けられない。

e 農業経営や家政の行為に先立って確固とした意思が存在する、と考えられている。身体と意思とが分離して捉えられ、身体的要因が情緒・精神や意思に及ぼす作用が捨象される。

容易に分かるように、農業・農村で生を営む人々の主観的な事実と外部の観察者の眼差しとの間には、AとDとaとeに対応するギャップがある。このギャップを緩和するためには、観察者が性急な実用主義に幻惑されてシステム指向を絶対視してしまうのではなく、この指向を積極的に相対化する努力が必要である。また、マネジリアルな思考で押し切るのではなく、農業や農村生活に展開する行為の特質を把握することから始めるべきであろう。

およそ右のような考察を受けて、本稿では、農業や農村生活にアプローチする上で求められる行為観を模索しておきたい。すなわち、まずシステムの行為の特質を概観し、これを克服する行為(観)の一つである演技的行為に触れる(二)。そこから得られる示唆によりつつ、農的行為と呼べる行為類型を際立たせ(三)、これが順調に展開するための条件を考察する(四)。そして、錯綜する多様な行為群に支えられる農業と農村生活を俯瞰しておく(五)。

二 システム的な行為観の相対化

行為論の方法

行為についての見方を展望するためには、いくつかの作業が必須である。

① 農業や農村生活に展開する行為を具に観察する。行為の状況と意味、行為により行為者や生活の場に生じる変化について、解釈的な方法や生理学的、心理学的な方法を駆使しながら克明に調べる。

② 既に形成されている行為の様式論を、叩き台として利用する。

③ 新旧の哲学を参酌する。システムの行為観を超えることは、それが心身深くに浸透し私たちの内面を律しているだけに、生易しいことではない。実存とは何か、身体や精神をどう理解するかという、デリケートな問題にぶつからざるをえないからである。

これらの諸作業を重層的に行なうのが本筋であるが、ここでは②の一説を手がかりにしつつ可能な範囲で①や③に触れることにしたい。

システムの行為の特質

これから相対化しようとするシステムの行為について、その特徴を振り返っておこう。

この行為には、二つの局面が考えられる。一つは「システム的意思決定」という行為者の内面の過程であり、もう一つは「物的・制度的なシステムに参加し組み込まれた行為」の局面である。

農業と農村生活をめぐる諸学がこだわってきたのは、前者である。後に言う演技的行為や農的行為をも含む人間の主体的な諸行為が帯びる、

〈状況〉↓計画↓(実行)↓反省〉というシステムティックな指向が抽象され、実体視されたのである。他方、後者すなわち「物的・制度的なシステムに参加し組み込まれた行為」は、機械や施設、またはこれらを合理的に運営しようとする制度に制約される行為である。ローンに縛られるマイホーム家族、マシンと道路交通制度に乗せられるドライバー、インターネットや共販の傘下で半ば労働者化している農家などを思えば分かり易い。

この両局面は互いに無関係ではない。すなわち、〈状況〉↓計画↓実行↓反省〉のリンクの内から実行という環が漏れ落ち、計画と反省という精神的な環だけで成り立つのが「システムの意思決定」である。これに対して、実行の過程が行為者の心身によってではなく外部の物的・制度的な要因に規定されるのが、「物的・制度的なシステムに参加し組み込まれた行為」である。いずれにおいても、行為者の心身と実行過程との間には深い関連が見られない。

心身の展開が格別に意味を持たない限りで、両者は親和的である。「物的・制度的なシステムに参加し組み込まれた行為」は「システムの意思決定」を前提に展開する、とさえ言える。たとえば、ライスセンターという物的・制度的なシステムを逸早く利用するのは、省力や経済性の観点から米作を割り切り、システムの意思決定の発想に馴染み易い人々であろう。逆になかなかライスセンターを利用しないのは、収穫の労作や達成感という心身の過程にこだわる人々であろう。そして、自身の判断と思ひ切りによって物的・制度的なシステムを選び参加したとしても、その後においては投企性が薄まる。自身の目的が、物的・制度的なシステムの展開原理に合致しこれに吸収されるからである。ライスセンターに拘を持ち込んだ人々は、この装置のメカニズムに従って作業するしか

ない。というよりも、米のことは一時忘れるのである。

つまり、「物的・制度的なシステムに参加し組み込まれた行為」(以下では、これを「システムの行為」と呼ぶ)は、特定の物的・制度的なシステムを選択しようとする意思が機縁になる限りで主体的であるが、爾後においてはシステムに支配される。その様子は、次のようである。

“与えられる計画が、機械的に始められる。効率や卒のなさへの配慮以外には、格別の感慨も湧かない。ときに忘我の境地に陥ることもあるが、まさに陥るのであって昂揚感が伴うわけではない。そして、基本的には忘我してはならず、心が身体の動きを冷静に監視し制御し続けなければならない。より正しく言えば、心が身体を精確に動かすよう、内なる別の心が監視し続けなければならないのである。”

こうした行為の積み重ねは、身体と心の動きに特有の傾向をもたらす。その傾向を特定するのは難しいが、しばしば生活世界のセンスと折り合わないことがある。家でぶらっとしているよりも会社で仕事をしている方が落ち着く、自適なはずだった余生がたまらなく手持ち無沙汰だ、と言ったようにである。あるいは、行為の積み重ねのなかで独特の美感(観)なり快感(観)が醸成されているのであろうが、日常の生活の場にそうした美感や快感が何かしら適合しない。”

ここにかがわれるのは、機械、装置などの物理的な構造や経済成果指標などの数的な記号に疎外された人間、計画や飛躍を断念してしまっただ即自としての人間である。あるいは、生命感やしなやかさ、共鳴力という持続としての特質を欠き、固化、物化し“笑い”(ベルグソン)の対象になりにかぬ人間である。

演技的行為の理論

このようなシステムの行為（観）を超えようとする行為論が、さまざまに提唱されている⁵⁾。ここでは、山崎正和の演技的行為論に注目してみよう⁵⁾。

山崎は近年の消費社会の動向への洞察をふまえて、演技的行為について論じる⁶⁾。

“人間の心身全体の行動でありながら、直接的には現実的な目的の実現をめざさず功利的な有効性や倫理的な善悪とは無縁の営みであり、その意味において一種の非現実的な行動である。しかし、その反面、それは現実の行動以上に高い緊張をはらんだ運動であり、その当人に快感や昂揚感を与えるのみならず、広い意味でその人間の生きる姿勢の根本と結びついてゐる……”

こう紹介する限りでは、演技的行為とはいかにも非現実的な行為のようである。だが、この行為は「構想や想起」「礼儀的作法や化粧」「ごっこ遊びや社交」として、日常生活の多くを成り立たせている。これらに共通する特質を挙げると、次の四点である。

- ① 人と人との結び付きならびに身体的・技能的な熟練を前提にする。
- ② 展望と没入の統一——行為は漫然と行なわれるのではない。食事を摂って栄養を付けよう、運動して体力を付けようなどの目標があり、そのための用具が調達され手順がプログラム化される。そして、ある思い切りのような決断とともに実行に移される。しかしながら、実行の過程で目的合理性はトーン・ダウンする。もちろん破棄されたり無視されるのではない。依然として目標やプログラムは尊重されつつ、その都度その都度の行動に心と体が没入してゆくのである。

生産労働やシステム的意思決定論では、実行過程はブラック・ボックスである。あるいは、冷静な心に監視される単純肉体労働の過程に過ぎない。これに対して、演技的行為の“実行”では、展望しながら没入する——没入しながら展望を忘れない。緊張関係そのものである。

- ③ 他者の眼——欲望の充足を引き伸ばす過程に他者の眼が介入する。本物の演技では他者は観客であるが、日常生活に埋め込まれた演技的行為では“自身の内なる他者”であることが多い。既に形成されている作法や美意識が受容され顧慮されるのである。調理やスポーツの反復練習でフォームに気を遣う、独りきりの食事でもマナーに従う、あるいはお決まりのセリフに心がけつつ挨拶を申し陳べるものだが、“フォーム”“マナー”“セリフ”への顧慮は、他者の眼を持つとうとすることにほかならない。もちろん、グループ活動などでは、他者による批判や称賛の眼が具体的に存在する。

- ④ 現実生活の補完——演技によって、人は現実生活を生き生きと生きることが出来る。お悔やみを申し陳べるうちに、心身の底から悲しみや無念さがこみ上げてくる。煩わしいながらもマナーを踏襲することによって、食事らしくなる。念願の目論みを目的合理的な努力によって成就したとき、身振り手振りなどを交えながら追体験しないではいられない。思い出せないことがらが、その折りの行為の流れを再現してみうちにふと思ひ出される。このように、演技的な行為は、現実生活を始めさせたり終わらせる、あるいは充足度を高める役割を果たしているのである。

右のように、山崎の行為論は、いわゆる「絶対矛盾の自己同一」の気配を感じさせる、美的たろうとする行為論である。それは、H・ベルグ

ソン、J・P・サルトル、M・ポントティを批判的に摂取した、次のような人間観と世界観によっている。

「意思について」意思は、それだけを以てしては、行為を始めさせることも終わらせることもできない。気分的な動機に媒介されて行為は始まり、終わる。その途上でおのずと意思は明瞭になる。意思は動機によって操られ、これを操るのである。その意味で、先に述べた「展望」もそれだけでは行為に結び付かない。思い切りのような決断によって行動に移ると言ったが、気分的な動機にくるまれて事は始まるのである。

「身体について」通常言われる身体は生身の医学的身体だが、それは人間の身体ではない。人間の身体は教育され訓練され習慣を帯びており、そこにはリズムがある。リズムを持つ身体であってこそ、氣分に媒介されて意思を直視できる。

「世界について」世界はリズムの集合体である。身体が帯びるリズムを通して人間は世界に繋がり、世界に住み込む。と言っても、人間はその世界を発見しきれないでおり、これを探り当てようとするのが演技である。

「自我と共同主観について」ここで言う世界は、没個性的で全体主義的な世界ではない。また、自我が始めに明瞭に存在してその上でシステマティックな共働が組み立てられるのでもない。当初に、不確かなながらも自我はある。それらが共働しリズムを探り当て合う過程でそれぞれの自我が判然とし、かつ自我と他我（他の自我）との間に共同主観が醸成されるのである。

何かと批判的で自虐的に論じられがちな現代の消費生活について、また秩序や法則が見出されにくくともすれば無秩序や混沌の領域と見られ

がちな消費について、山崎は肯定的な理解を示す。そのなかで、システマ的な人間観や行為観を相対化しこれを超えようとしている。その意味で、同氏のいう演技的行為には大いに裨益される。と同時に、不十分に感じられるところもある。

ア「職人技術」に触れられはするものの、仕事や労働と呼ばれる行為については前向きには考察されない。

イ物の消費ではなく、サービスの消費が着目される。食事を例に言えば、人と人とが結び付く状況の中である種のスタイルが踏襲される会食などは積極的に着目される。反面、家事的調理の光景などは問題にされない。

ウ意味的にまとまりのある比較的小さな単位の行為が取り上げられる。同種の行為が長い期間にわたって繰り返され累積するとき心身にどのような変化が兆すか、という長期的な考察の視点はない。

エベルグソンの持続、サルトルの投企、メルロ・ポントティの心身関係論が援用されるのだが、持続、計画と飛躍、気分的動機やリズムなどについては幅広く精密に見た方がよいのではないか。

ア・エの疑問は、演技的行為論の間口の狭さに起因する。そこで、次のように間口を広げてみよう。

「アについて」演技的行為として遊びや余暇、社交が念頭に置かれるのはよいとしても、仕事や労働やビジネスを生活世界から排除してしまうわけにはいかない。この局面にも眼を向けてはどうか。「イについて」サービスつまり人と人との係わりだけでなく、人と物との係わりにも積極的に着目してはどうか。ここでの「物」はさまである。道具、機械、装置、消費財が含まれるのはいうまでもないが、消費に供される物が製作される過程、製作の背

後にある自然なども物に含めてよいであろう。

「ウについて」同種の行為が繰り返される過程の全体、それぞれにまとまった意味を持つ行為がいくつか続けられる過程の全体に着目することも、有意義である。行為のシリーズの展開が行為者の心身や自我の形成にもたらす効果が考察できるだろうからである。「エについて」まず計画と飛躍についてであるが、何らかの程度において外的条件との規定関係があるはずである。外的な制約に捕われないのが投企の特質だ、と言えないことはない。だが、そのような態度を範としつつも、現実の生活を対象とする場合には外的制約を直視せざるをえない。

次に持続についてであるが、精細に見ればその機会とパターンは多様である。「百メートルを全力疾走する」ときの昂揚感と主客一致感も純粹持続の感得であるし、ベルグソンが紹介する次のような例もまた、純粹持続の感得である。

「コップ一杯の砂糖水……なぜ私は砂糖水のとけるまで待たなければならぬのか。そこでの現象の持続は物理学者にとっては相対的……私の意識にとってはその持続はひとつの絶対である。けだし、その持続はある度合の待遠しさと合致し、この度合は厳密に定まっているのである。……（そこには）予見されなかった真新しいものが……絶えず造りだされる……」

「芸術家は一種の共感によって対象の内部に自分をもどし、自分と対象とのあいだに空間がつくった障壁を直観のはたらきで崩して低めながら目的をはたす。」

「持続の……感じが深みにとおり合致が完全になるにつれて、私たちはいよいよ生命につれもどされ、生命はますます知性を吸

収しながらそれを越えてゆく。」

ここには、「待つ」「共感」という表現で特徴付けられる、静かだが強い緊張を孕む昂揚感と主客一致感が見出される。

さらに心身関係について言えば、心と身体の間には物や記号が多様に介入している。そして、小技術に介入された心身が芸術や芸術家の域にまで高められることがあるかと思えば、巨大なコンピュータ・システムの中で心身が触まれる場合もある。あるいは、スムーズで親密な人間関係を保つに妙な言葉があるかと思えば、CMコピーや流行商品のように目まぐるしく交替し、それらによって踊らされ疲れさせられるだけの記号もある。その意味で、心と身体の相互浸透の關係に視野を絞るだけでは不十分であり、心の基層に食いつく物や記号にまで眼が向けられねばなるまい。

もう一つの行為

システムの行為において、行為者は実存として存在し続けることができない。つまり、どのようなシステムを選択するかという点では投企も可能であるが、爾後において自ら行為の成り行きを展望しそれに賭ける気持ちで飛躍し傾倒することはない。また、システムの行為においては心と体は分裂したままであり、相即して成長することがない。心はいつも身体の動きを監視していなければならないし、機械・施設などの技術合理的・経済合理的な外的システムが求める身体の動きと行為者の心の動きとの関係は常に一定したものでなければならないからである。そうした限りで、独自の世界観が構築されることもない。システムの行為のこのような傾向に対して、演技的行為はなお実存であろうとし、そこには心身の相即した展開や独自の世界観を期待する余地がある。ただし、

演技的行為はいかに生計をたてるかと言ったことに無縁であるが。

要するに、システムの行為一辺倒では人格が破砕されかねず、演技的行為一辺倒では生活がやっていけない。両者が補い合うとき合理的で快活な生活の光景が彷彿するのだが、何かしら不安を拭い切れない。それは、「日常の生活を確かな感触と真摯な努力によって生き抜くなかで自我を発見し成就することができるか」と言った類の不安である。この不安はどう解消されるのか。——この点について光明を見出すためには、農業と農村生活の展開を丹念に観察するのが近道であろう。

三 農的行為の展開過程

行為の三段階

とはいえ、具体的な事例に即して行為経過を丹念に叙述するだけの余裕はない。ここでは、具体的な状況と行為を念頭に置きながらモデル論的に展開するにとどめたい。

すなわち、農業や家事の行為には、まとまりと拡がりにおいていくつかの段階がある。

A “押す” “持ち上げる” “切り刻む” “叩く” など。——行為と言えば行為である。しかし、それだけでは通常は意味を成さず、後に述べる諸行為に組み込まれ位置付けられることによって始めて意味を持つ。

B “種を播く” “収穫する” “煮る” “配膳する” などの、いかにも農業や家事作業らしい行為。

C 農作業では一年なり一作期、家事作業では一食なり一日の食事。目標の実現が明瞭に読み取れる。

D ある数年間を稲作に賭けたり、子供の手が離れるまで家事に専念すると言ったように、かなり長い時間の射程での行為。

E 生涯を農業や農村生活に生きる。そう決断して実践するのも行為である。

無機的な断片であるAを除けば、B→Eにはそれぞれに意思とその成が見取れる。その内でも、行為としてのまとまりが最も濃いののはCである。そこで、これを「基礎行為」と呼ぶことにしよう。これに対して、Bは基礎行為を構成するいわば一幕一幕であるし、DとEは基礎行為の累積である。そこで、Bを「下位行為」、DとEを「シリーズ行為」と呼ぶことにしよう。

展望

さて、三段階で捉えられる諸行為は、

下位行為

← →

基礎行為

← →

シリーズ行為

というように、双方向で結び付いている。まず確認しておきたいのは、その一つの流れ(→の方向)であり、「展望」という結び付きである。

すなわち、農業や農村生活が自己の生き方として選ばれるとき、そこではシリーズという時間的拡がりで展望がなされている。今三〇歳の自分が、やがて訪れる四〇歳、五〇歳をどのようなありさまと満足度で過ごしているか。理想を掲げる人はそのためのプログラムを考えるだろうし、不安を覚える人はこれを避けたり解消するための方途を考えるであ

ろう。あるいはまた、“十年間は稲作に専念してみよう” “経営移譲を受けるまでに農作業能力を身に着けたい” “我が家の食生活を改善して行きたい” と展望され、プログラムが胸中に展開されることもあろう。このような展望が抱けないとき、人は絶望し疎外される。

このようなシリーズ的拡がりでの展望が導きになり、さまざまな事情が参酌されながら、近い将来の農業や生活が展望される。「近い将来」という時間の幅を厳密にする必要はないのだが、農業であれば一年や一作期が、生活では毎日なり毎回の食事準備と考えてよいであろう。要するに、シリーズ的な展望が基礎行為の展望に影響を与えるのである。そして、後者の展望はさらに具体的な作業のあり方を規定する。準備する材料や道具・機械、作業の段取り、達成の目安などを決めるのである。問題はこの展望、つまり状況を見渡しつつなされる主体的な計画が、どう実行され実現されてゆくかである（←の方向）。農的行為の特質は、その過程に見出される。

下位行為の展開

ある農作業、たとえば野菜苗の定植作業を念頭に置いてみよう。また、ある家事作業、たとえば食事作りを念頭に置いてみよう。

【農作業の例】定植作業は、数年間の畑作計画やこの一年の野菜作計画に基づいて計画される。もちろん、苗の育ち具合、気温や雨量、当日の天気などにも左右される。こうした外的な制約を受けて、ときに否応なく行為に踏み切られるのである。計画を実行へと媒介する気分的、雰囲気的な要因の影響が薄いのであり、システムの行為に近いと言える。

作業に従事する主体は、幾度かの作業体験を持っており、作業はリズムミカルである。むろん行為主体は一人とは限らない。同一の工程を行な

う、圃場の整地と植え付けという異種の工程が並行する、母親が作業に従事し子供が脇で見詰めるといったように形態はさまざまだが、複数人の共働でなされることが多い。それら当事者の間では、呼吸やリズムが共有されている。

そして、行為主体は作業に没入する。植え付けの間隔、深さ、覆土の厚さ、作業時間などの計画内容を忘れることなく、鍛えられ獲得されたリズムと今生まれつつある他の作業者との間でのリズムの中で、没頭するのである。この没入は、一面で機械的作業を坦々と続けるときに忘我に似ている。反面で、作物が成育し易いようによく整えられた土やそこに居場所を得た作物への共感に支えられている。作物や土が労働対象と見られるだけではないのである。

やがて作業は終了する。当初の計画通りにできたかどうかの確認がなされる。一応満足できても、これからの長い成育過程を想い期待と不安が交錯する気分の中にいる。

【家事作業の例】下位行為に当たるのは主食や副食の各品を作ったり、調味や火加減をしつつ煮たり焼いたりする過程である。

まず、当面の食生活指針、ここ数日来的食事メニューへの反省、予算の制約、食材のストック状況、調理に要する時間などが考え併せられ、計画が立てられる。計画が実行に移されるについては、“そろそろ食事時だから” “とにかく作って食べ（させ）なければ” という状況に迫られる。その意味で機械的に踏み切られる。だが、精細に心身の動きを観察すると、「さっ、始めようっ」という思い切りがあったり、気乗りしないままに台所でごそごそしているうちにいつの間にか本腰を入れていた、という場合もある。気分的な動機がないとは言えないのである。

着手するとともに、かねてから習熟している腕によって作業はスムー

ズでリズムミカルである。この作業も、共働である場合が多い。もちろん、その内容はさまざまである。大量に作るために二人が包丁を使う、兄がすりこ木を回し弟がすり鉢を押さえる、親が作る脇で子が待ち兼ねたり味見する、といったように。ここでも、リズムが共有されているのである。

そのなかで、行為者は作業に没入する。当初に企画されたことながら十分に配慮され、しかもリズムが損なわれないで、である。その没入の性質は、溶けてゆく砂糖を無心に見るうちに、砂糖という客体と私という主体との合一が果たされる（ベルグソン）成り行きに似たものである。材料に食いつく刃先、グググッと煮立つ鍋の中、ジュージューと焼ける肉や魚などと行為者との関係は、実験器具・試薬と化学者との関係と異なって、親密である。

そして、一つの工程が終わる。期待通りであるかどうかの確認が一応なされる。それに満足しつつも、緊張が弛んでしまうわけではない。

【下位行為の特質】二つの例から分かるように、下位行為は次のような特質を備える。

- ① 農業や生活の全体においてこの行為が担う役割が自覚され、かつ段取りの全体が展望される。
- ② 生産や生存をめぐる状況に迫られて始められる。しかし、開始に際して気分的、雰囲気的な要因がないとは言えない。
- ③ 始発状況の違いにもかかわらず、身体的な熟練とリズムあるいは共働に因むリズムによって、安定した展開を辿る。
- ④ 行為者は没頭する。没頭の性質は、まるっきりの忘我ではないし、「百メートルの全力疾走」のときのような動的な主客一致感でもない。
- ⑤ 行為が終了しても、心身が解放されるわけではない。気分として、

作業の全体的な成り行きと内容が気掛かりである。

- ⑥ 右の一連の過程は、行為者がさらに熟練しリズムを獲得する過程でもある。

基礎行為の展開

右のような特質を持つ下位の諸行為が、交替しながら続く。苗床を作る――……―圃場を整地する―定植する―灌水する―防除する――……―収穫する、副食材料を下搾りする―主食を仕掛ける―副食を調味しつつ煮る――……―配膳する、と言うようにである。個々の鎖である下位行為は、私たちが農業や家事の仕事と呼ぶものの輪郭でもある。だとすれば、ここに言う基礎行為とは何か。具体的な作業そのものでないものが、なぜ行為なのか。

【農作業の例】考察の手がかりとなるのは、作業工程間の間隙である。たとえば定植と防除の間には、格別の作業がなされない空隙がある。この空隙を全く無関心に過ごすかと言えば、そうではない。土の湿り具合、風の強さ、陽当たりなど気掛かりなことはいっぱいある。いかによく育つかを、ときに作物に感情移入しながら気にするのである。このことは下位行為間の間隙に限らない。当該作物を手がけているあいだ中、気遣いは続くのである。

もう一つ着目されてよいのは、生産や育成が終局を迎える時期である。右の気遣いは単なる気遣いを超えて、より複雑なものに高まる。

当初の計画がそろそろ成就されそうだという、わくわくした緊張感。育つこと、育ってきたことの不思議さ。依然続いている気遣いに、このような感慨が付け加わる。こうした感慨の複合は、共働でやってきた事実によってなお強いものになる。あるいは、この感慨によって共働への

回顧と自負が強められる。

ここに「売り物になるかどうか」「高値で売れるかどうか」という別種の氣遣いが介入すると、感慨は弱まる。そのことは、今は別にしておこう。

右のような感慨の複合は、無心の境地であり深い体験である。この無心と深みの中で主客の対立は解消され、ときに逆転が起る。至極当然のこととして受け入れられてきた美しさ、快さの内実が変化するのである。たとえば、まっすぐな直線やくっきりとした円弧こそがきれいだと感じてきたが、今は胡瓜のねじれやトマトのいびつさもきれいだと思える。それを育んできた土は、もはや嫌悪の対象ではない。労ってやるべきもの、快いものなのである。——身体的な作業と心的な氣遣いのなかで、ある生命観が対象と行為者の間に兆し共有されていた。それが、彼我に分裂して、行為者たちに新しい美感（観）、快感（観）をもたらしたと言えようか。

しかも、以上の過程は共働する行為者たちの多くに進む。行為者の心身条件や共働への関与の仕方によってその度合いと内容に幅があるにせよ、一種の共同主観が醸成されるのである。

【家事作業の例】主食を作りながら副食の煮え具合が気になる、火力を調整しながら味加減が気掛かりだ、などと氣遣いには休む暇がない。追われるような、余儀なくされる氣遣いなのだが、作業の全体が終局に近付くにつれて別様の感慨が兆し強まる。

“もうすぐ食べられるよ”というわくわくした気持ち。“できただろう—できるものなんだよ”という能力と努力への自負とも、火・水・食料などからの賜り物への驚きともつかない感慨。早い時期から保留してきた味付けの成否への不安。こうしたものが複合した感慨である。これ

は、共働という事実によって裾野のより広いものになるし、逆にこうした感慨を共有するなかで共働の実感ほさらに強いものになる。

そして、皆が食べる中で評価が下される。“おいしいね” “何だ、この味は”などの評定もさることながら、心身活動を伴う共働を経た後には、従来とは異なる美しさや快さが感じられ、了解される。極端な例を言くと、“まずいけどおいしい” こともあるのである。子供を主な行為者とし、見守る親を共働行為者として展開してきた場合には、よくあることである。

【基礎行為の特質】基礎行為の本質は、身体的動作にはない。多様な下位行為群を包括する概念だと考えてよいが、それだけでは不十分である。縮言すれば、基礎行為は「姿勢」であり「身構え」なのである。

“世界の中に虜になりながら心と身体を能動的に統合することによって生成される姿勢とパースペクティブ。そこに伴う意識。この意識を通しての世界把握には多様な可能性がある。”

「姿勢」とはこの意味での姿勢である。つまり、野菜を栽培したり食事を作るために、行為者は自然や社会という外的世界による制約を受けこれに従う。その過程で体と心を多様に動かし統合するのだが、両者の動きは別であったり並行を辿るものではない。心を伴う技術や動作であったり、身体的な技術や動作に裏付けられる心なのである。そうしたなかで、行為者には独特の姿勢が生まれる。身体という物理的・生理的な構造と、心という心理的な構造とが訓練のなかで独特の相互浸透を遂げた心身。この心身に応じて物事を見る視野は限られるが、限られたなりに対象に臨もうとする。そのように身構えられるのである。この身構えないし視野の多様性に応じて、世界は一様ではない。美しさであり快さであり、独自性を持つのである。——ここではもはや、既定で不変の美し

さや快さはない。無心とも感慨の複合とも捉えられる事態を一種の対話ないし遊びと表現するならば、対話や遊びのなかで新たな価値観が醸成されるのである。

しかも大切なのは、醸成される価値観が、共働を通して、場合によっては「まずい味に顔をしかめる」というような共働メンバーの間でのサンクション（制裁）を通して、共同主観になることである。

「農＝生命」としばしば言われるが、これは「生きるための糧を供給するから」とか「安全な食生活を保証するから」という論点においてだけでなく、右の局面でもなされなければなるまい。純粹持続と云っている、独特の心身の構えと云っている、あるいは夢中の対話と云っている。その中で多様な生命観が発見され、それはまた、私たちの生活を底から支えてくれる快や美などの価値観にも結び付いているからである。

シリーズ行為の展開

右のような基礎行為が幾度となく繰り返される。これが農業であり生活なのだが、この繰り返しつまりシリーズとしての行為は、どのような性質を帯びているのだろうか。

第一に考えられるのは、基礎行為が繰り返されることによって姿勢や身構えがしっかりすることである。身体に獲得され人々の間に共有されるリズムが、よりスムーズで身に着いたものになる。さまざまな感慨や美感・快感が、一時の感情や陶酔や錯覚のようなものではなく、安定性の高い美観、快観になる。農事であれ家事であれ、その仕事に深く係わることを通して価値観や世界観が形成されるのである。

これは、農業という仕事、家事という仕事のそれぞれに従事続けることによって生じる事態である。しかし、農業と生活の両面に生きる農

業者が、一方の仕事にのみ係わり続けることは稀である。従って、右では説明の便宜のために農業の行為と家事の行為とを分けて捉えたが、截然とした区分は不要である。家事の下位行為―農業の下位行為―家事の下位行為―……というように、両者が入り組んだ成り行きに関心が注がれてよいのである。この成り行きこそが、農業や農村生活という生活世界なのである。

それでも、もちろん下位行為や基礎行為に見られた成り行きが展開する。当然のことながら、両者が合わさった分だけ、身体が獲得するリズムのヴァリエーションや感慨の綾は多彩である。そして、安定している。注目されてよいのは、農業の領域でもたらされる美感や快感と家事の領域からもたらされる美感や快感との間に、いわゆる共通感覚が生まれることである。

一例として、「おいしさ」を取り上げてみよう。化学的に割り出され合成されたおいしさや食品CMなどで先入観として植え付けられ取り込まれたおいしさもあるが、こうした類のおいしさは農作業の感慨や食事準備の感慨のなかで超えられる。先の「おいしくないけどおいしい」はそうであるし、自ら手がけた作物は一人おいしいものである。そして今、さらに見出されるのは、農事の領域と家事の領域から生まれる二つのおいしさが合流し、相互に浸透することである。農業と生活のリズムを共有する者の間でのおのずと分かり合える「我が家の味」や「郷土の味」は、右のような背景を持っているのではないか。

農的行為の特質

下位行為、基礎行為、シリーズ行為が係わり合う全体は、次のようである。

“ 気象や経済や技術、あるいは自身が働きかける物などによる制約を回避できない。しかし、自身で計画し、具体的な行動に賭け飛躍することもできる。むろん、外的な制約を受ける分だけ計画の内容は狭められるし、飛躍に際して気分的な動機による影響は少なくなるが。そして、爾後の行為はそれまでに鍛えられた身体の動きやリズムに支えられて運ばれる。そこでは、没入しつづしかも計画全体の流れが忘れられない。

没入の性質について言えば、ときに疲労によって物化した心身状態に陥ることはあるにしても、計画の成就や失敗によって良くも悪くも生き生きとした感慨に浸ることはできる。あるいは、静かな昂揚感や主客一致感の中で生命のリズムに触れることができる。そして、このような行為の繰り返しの中で鍛えられ洗練される身体のリズムは、アート(術)とも呼べる技倆とこれに裏付けられた美感(観)や快感(観)を伴う。また、長年の間携わり続けた行為には、何かしらゆかしさやいとおしささえ覚えるものである。”

概して、巨大な機械・施設ではなく、道具や小機械に助けられて展開される手仕事の世界である。ここには、十全ではないにせよ、計画や賭けや飛躍、あるいは持続が保たれている。その持続は、端から見れば動きの少ないものであるかもしれないが、「砂糖水を見る私」(ベルグソン)や「芸術家」(同)がそうであるように、宇宙のリズムに共鳴する静かな昂揚感に溢れている。このタイプの行為を、「農的行為」と呼ぶことにしよう。

これまでに述べたシステムの行為、演技的行為、農的行為の特徴を、一覧的に示しておこう(下表)。

システムの行為・演技的行為・農的行為

行為の類型	対象局面	展望と計画	開始と進展	持続の性質	価値観の醸成	例	そ の 他
システムの行為	生産と消費の全般にわたる。主として人と物との係わりにおいて。	目標をにらんで周到に行為の全貌が展望され緻密に計画される。ただし、計画の主体は他者である。	日時や時刻の到来とともに始まる。進展過程では気分的要因は排除される。	作業への傾倒や対象との主客一致は生じない。醒めた理性によって心身の動きが監視される。	心身の傾性が形成され、それなりに価値観は生まれる。しかし、日常生活に折り合うとは限らない。	◇与えられた作業層に忠実に肥培管理を行なう。 ◇インテグレーションの傘下に入った農業経営。	ルーチン化したり緊張感を欠くと、「利便性にはまった行為」に後退することがある。
演技的行為	主として消費や社交、人と人との係わりにおいて。	目標をにらんで周到に行為の全貌が展望され緻密に計画される。伝統的な様式も摂取され超えられる。	決断と思ひ切りによって始まるが、気分や雰囲気も大きな動因である。進展とともに気分が高まる。	共働(演)する相手や状況との動的な主客一致が感じられる。	心身の傾性が形成され、主として美観が育まれる(快観も育まれる)。	◇群衆で互いに声を掛け合う。 ◇生産者どうし、農業者と消費者の間での交流交歓。	ルーチン化したり緊張感を欠くと、「慣習に制約される行為」に後退することがある。
農的行為	主として生産や製作、人と物との係わりにおいて。	目標をにらんで周到に行為の全貌が展望され緻密に計画される。既存の様式(技術)も顧慮される。	日時・時刻、気象等にも制約されて始まる。計画に忠実に展開されるが、進展とともに気分が高まる。	働きかける対象との静的な主客一致が感じられ、終局に近づくにつれて高まる。	心身の傾性が形成され、主として快観が育まれる(美観も育まれる)。	◇篤農的な農業者の軌跡。 ◇「農業が好きになった女性たち」*。	ルーチン化したり緊張感を欠くと、制約される行為に後退することがある。

- 注) 1. 「価値観の醸成」欄は、シリーズ行為の展開のなかで醸成される価値観についてである。
 2. 「利便性にはまった行為」「伝統・生存に制約される行為」については、本文・五を参照のこと。
 3. *については、拙稿「農業者の価値観の醸成に関する基礎的考察」(1993年)を参照のこと。

四 農的行為展開の条件

我が国の農業と農村が展開してきた経緯を想うとき、また多くの人々が背を向けがちな現代の農業と農村を想うとき、右の叙述には違和感を覚えるかもしれない。

もちろん、農業と農村生活に継続的に従事すれば必ずや好ましい状態が醸し出されよい生き方ができると言うのではない。強調したいのは、農業にそのような可能性ないし蓋然性があるということ、このことを無視してはならないということである^{一〇}。

その意味で大切なのは、農的行為が順調に展開するための条件である。この点について、以下に掲げておこう。

【展望できる】下位行為、基礎行為、シリーズ行為のいずれについても全体像が展望可能でなければならない。すなわち、

- ・望ましいことや解決したいことを自由に模索し表明できる。
- ・右のことについて、状況を把握したり基礎知識を得ることができ

る。

- ・課題の達成や問題の解消について、見通しが付けられ糸口が掴める。

という三点が、不可欠である。

たとえば「農家の嫁は大変」と言われることがあるが、これは農業と家事の下位行為についてさえ展望がままならないことによる。あるいは、四〇歳頃に農業が好きになる女性が多いが、これは、育児から解放されたり腕に自信が着くことにより農事の下位行為や基礎行為に展望が利くようになるため、経営権やサイフを譲り受けることにより農業と生活の下位行為・基礎行為・シリーズ行為に展望が利くようになるため、と考

えられる。さらに、展望に影響を及ぼすのは農家や農村の内部の事情だけではない。シリーズ行為の展望に大きな影響を及ぼすであろう「農政の方針」などの社会的・政治的なことがらも、無視できない。

【気分的動機の涵養】いかにも曖昧模糊としたことがらのようだが、次の例を想うと理解し易い。

四〇歳頃から農業が好きになると前後して、農村女性たちはグループ活動に積極的になる。活動の趣旨と内容はさまざまで、それぞれに楽しさや実益を伴う。だが、当人にどれ程自覚されるかはともかくとして、グループ活動の重要な意義は、そこで気分的動機が醸成されることにあるのではないだろうか。それぞれのグループ活動が帯びる活気は、参加する女性たちをヤル気にしてくれる。その雰囲気の中で計画への飛躍がなされるのである。たとえば長期の経営計画や生活設計などのシリーズ行為の展望は、もちろん家族や夫婦の間での改まった雰囲気の中でもなされよう。しかし、それはむしろシリーズ行為計画の仕上げの部分であり、生涯や向う十年間を見通そうとする気になってしまふのはグループ活動のような場においてであろう。あるいは、家族の間に適切な分業関係が形成されることも、農業や生活の場に好ましい雰囲気をもたらす。雰囲気に乗せられて農事や家事の基礎行為が、ひいては農的行為の万般がスムーズに展開するのではないだろうか。

これらは、農業者をめぐる人的環境の意義である。そして、グループ活動や家族員の協調などは、実は演技的行為の領域であり主題である。農村の人間関係や家族関係の近代化という深刻なことがらは、深刻なことがらとして理解し続ける限り、却って深刻さや悩みを増すこともある。むしろ、先に述べた演技の主題として捉え演じる努力のなかで、却って問題の克服力を得るのではないだろうか。

なお、人的環境だけでなく、自然的環境も気分的動機への影響を通して農的行為の展開を助ける。基礎行為が終局を迎える気分的な高まりのなかで新たな美感や快感が生み出されるのであるが、その気分を担うのは心身と対象だけではない。大地や自然なども、幾ばくかの役割を果たしているはずである。少なくとも、空缶が散乱した圃場や自動車の騒音の中では、感慨の高まりは弱められてしまう。良き感慨の高まりにふさわしい大らかで峻厳な自然的光景、とでも言えるものがあるのではないか。

【等身大の技術と情報】農事や家事の道具の内には、使う者の身体と一体になってとも言えぬリズムを生み出す物が多い。もちろん、産業としての農業、所得獲得のための農業の側面があるからには、道具や小技術にこだわり続けることはできない。銘記しておきたいのは、技術が巨大になるとき、心身のリズムが止むという点である。機械や装置が、それに固有な行動の形態とリズムを採るよう、行為者に求めるからである（二）。

同様のことは、情報や記号についても言える。心身のリズムに乗って出る掛け声や鼻歌は、心身の動きを快活にする。これに対して、行為の外から入ってくる声はたとえ気入りのCD音楽であっても、心身の動きを緩慢にする。また、収益性や生産性が過剰に意識されると、リズムが失われる。避けられないこととは言え、気がかりである。

【主知的態度の譲歩】右の三点は農的行為が展開するための環境条件であるが、主体の条件として次の点が欠かせない。——それは、慣れ親しみ浸りきっている主知的な態度を、一角でよいから崩してみることである。

正しいこと普遍的なこととして既に定着している知識、とりわけ科学

的な知識を、農業や農村生活から捨てることはできない。農的行為の一面面である展望は、科学的知識や科学的態度に多くを依存しているからである。しかしながら、科学的態度の下では身体的行為は心的空白にほかならない。そこで、空白にすることなく直観を注ぎ込んでどうか。行為の途上で感覚を研ぎ澄ませて、新しく生成するものに向けてみてはどうか。ここで言う「新しく生成するもの」とは、没入のなかで見えること、聞こえること、感触されることである。あるいは、没入の姿勢のなかでじわじわと高まり厚みを帯びてくる充実感のようなものである。この充実感こそは自己であり心身であり、生命であり世界ではないだろうか。

五 農的行為と農業・農村生活

多様な行為

農業と農村生活にはさまざまな行為が展開している。

- ◎ 慣習・生存に制約される行為
- ◎ 利便性にはまった行為
- ◎ システム的行為
- ◎ 演技的行為
- ◎ 農的行為

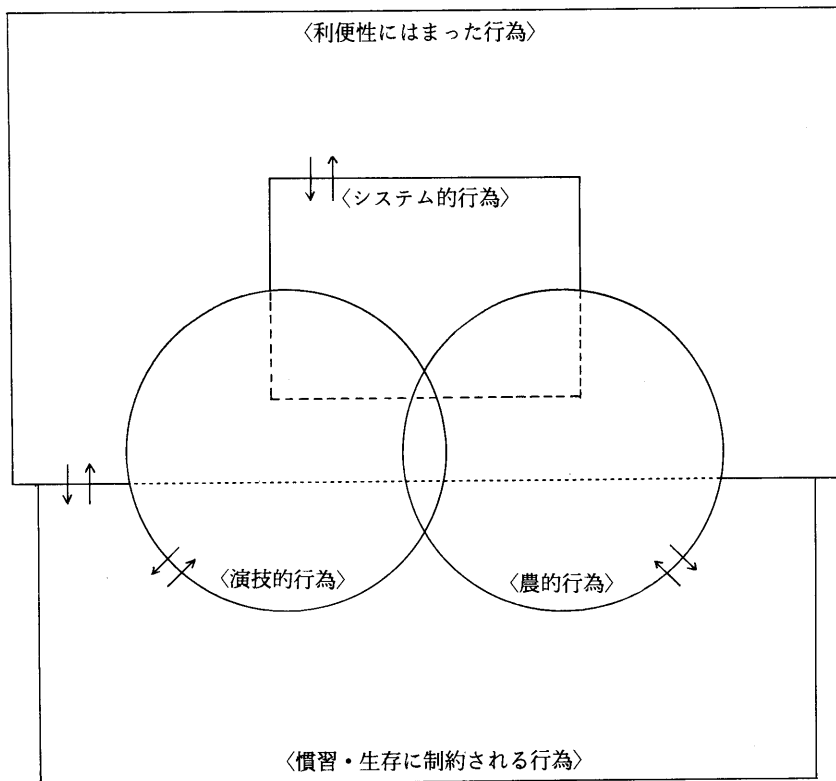
まだ触れていない二つを含む少なくとも五タイプが錯綜するなかで、農業と農村生活が展開する。そこで、行為相互の關係に注目しながら、農的行為を位置付けておこう（次頁の図を参照）。

【慣習・生存に制約される行為】端的な例として、冠婚葬祭の付き合いや医者通いなどが挙げられる。これらは、ほとんど選択の余地を与えない

いままに人々に行為を強要する。言い換えれば、農業者や生活者は伝統や生存の条件に縛られる存在であり、そうした諸条件は人々を即自化する圧力である。もちろん、人々は、終始縛られる制約され続けるのではない。後に触れるように、この種の行為のある部分については、「利便性にはまった行為」やシステムの行為によって受ける圧力が量的に減殺される。また、ある部分については、演技的行為や農的行為によって質的に変換される。

【利便性にはまった行為】「車や電話があるのは当然」のように、自動車や電話を使う。「煩わしい洗濯」は避け当然のようにクリーニングに出す。——このような行為である。これらは、「軽労働で高収益を」「便利で快適な生活を」という農業者や生活者の願望に沿う行為であり、「慣習・生存に制約される行為」から解放されようとする行為である。しかし、このような行為が当然のこととして受け入れられ、懷疑したり変革することがタブー視されるようになる。すれば、もはや解放とは言えない。それ自体がパターン化された慣習になってしまい、即自化への圧力に転化するからである。「不可欠かどうか分からないままに購入される農業機械」、
「持っていないとバカにされる恐さもあって買わ

農業と農村生活を支える諸行為



- 注) 1. □ は即自化する圧力または即自的な行為、○ は実存的な行為である。
 2. 上の図は、次のことを意味している。——〈慣習・生存に制約される行為〉や〈利便性にはまった行為〉という即自的な諸行為や即自化する諸圧力のなかで、これを超えるべく〈システムの行為〉、〈演技的行為〉、〈農的行為〉という主体的な諸行為が展開される。ただし、〈システムの行為〉は、計画とこれに基づく意思決定や決断の局面で主体的であるにとどまり、その限りで実存的な行為だとは言切れない。
 3. 矢線の意味については、本文を参照のこと。

れる自動車”などの例を想うまでもなく、農業や農村生活にいつも新たな慣習が生まれつつあることは否定できない。

【システムの行為】ライスセンターや選荷場などの利用組織、インテグレーションという生産と経済の組織。これらの傘下に入ると、自ら複雑な経済判断を下す労を免れるし、労働も軽くなる。整備されたコミュニティ・センターは何につけ快適である。——このように、農業と生活の万般にわたって施設化、サービス化が進み、人々は選んで施設や外部サービスに向う。こうした傾向は、「より軽い労働で高収益を」「より便利で快適に」という願いに逆行するものではない。その限りで人々は解放される。

だが、施設やその運営制度は人々にシステムの行為を求める。その中で、農業者や生活者はまたしても束縛され即自に落としてめられる。共販組織やインテグレーションの中で、農業者は労働者化し機械的存在になる。利用制限規程が多い集会施設では、談論の風発は端から諦められるのである。

【演技的行為】今や農村を個性的な出で立ちで闊歩しても破廉恥者扱いされる恐れは少ないし、夫婦で食事や旅行に出掛けることも多い。また、スポーツ・芸能などの趣味、自主的な学習や研究、あるいはボランティアなどのグループ活動も盛んである。演技的行為の特質を帯びるこれらの行為に共通してうかがわれるのは、農村に生きる人々が自身の人生を掛け替えないものと思い、エネルギーを燃焼させようとしていることである。そのために何かを企画し、従来（「出る杭は打たれる」など）とは異なった意味で他者の眼差しを受け、没頭する。そうしたことが、ごく自然なことと思われ始めているのである。

このような傾向は「慣習・生存に制約される行為」の止揚でもある。

集落とて一枚岩ではなくなり、個々の関心と能力によって多様なグループを作り分属できる。あるいは、伝統や慣習から文化活動の主題を受けるとき、一期一会で生き生きしているはずの演技は枯死し、慣習的行為に後退しかねない。

また、演技的行為は「利便性にはまった行為」を止揚するものでもある。画一的な暮らしの様式を受け身で享受することに飽き足りず、自ら心と体を動かしてこれを凌駕しようとするものだからである。そして、演技的行為は農的行為の順調な展開にも寄与することがある。先に触れたように、気分的動機を醸成することによって農的な諸行為のスムーズな展開を促すからである。

【農的行為】行為の特質については先に述べたが、この行為の特長についてはその結実である“生き生きとした知的な存在”を想い浮かべるのがよからう。幾度か農村に向いた人ならば、“知恵と生命力に溢れる人”に出くわし、“良質のインテリジェンス”を感じた経験があるう。

演技的行為が余暇などの生活局面を中心に展開するのに対して、農的行為は農業や家事などの仕事において展開する。必要に迫られて仕事するなかで、それを通して農業者や生活者が成熟してゆく可能性があり、ということである。この行為は、利便化・合理化を拒否するものではないが、画一化された行為やシステムにはなじみきらない。

農的行為の役割

右の五つの行為成分が錯綜し化合するなかで、農業と農村生活が展開する。また、農業を営み農村に暮らす人々が執り行なう具体的な諸行為は、五つの性質のいずれかを伴っている。ただし、いずれか一つだけの

行為成分を伴う場合は稀れであり、「救急車で病院に運ばれる」（生存に制約される行為）などの特殊ケースに限られる。むしろ、「小ざっぱりした身繕いでスーパーへ惣菜を買いに行く」（利便性にはまった行為＋演技的行為）、「孫夫婦に送るために漬物を漬ける」（農的行為＋演技的行為）といったように、いくつかの行為成分が複合する場合が多い。

ここで気がかりなのは、いずれのタイプの行為が優勢になりつつあるのか、人々の人生や農業という産業、ならびに農村という地域が真に生き生きとする上で欠かせないのはいずれのタイプの行為か、である。

言うまでもなく、農業・農村については「慣習・生存に制約される行為」に満ちたところというイメージが強かった。また、それが実態でもあった。しかし、耐久消費財や加工品の普及、あるいは外部サービス化の進展とともに、「生存に制約される行為」の物理的な苦しさは随分緩まった。あるいは、「まだまだ古い」とはいえ、「慣習に制約される行為」の煩わしさや厳しさも緩いものになりつつある。こうした動きは、利便化を求める人々の動機と努力によってのことである。そして、その結果が一層の利便化と合理化に向かわせている。今や、「利便性にはまった行為」や「システムの行為」が優勢だと言えるのではないだろうか。

そうしたなかで、利便化を求める人々のニーズに応えるということで、さまざまな施設が陸続と設置されている。公的事業による生産・生活関連施設の設置、企業主導によるリゾート拠点の整備などがそれである。これらは、いわば当たり前のこととして、利便化・合理化に寄与する（はずである）。表面的に見る限り、人々の日常は近代的になりさらに解放されつつあるのである。

しかし、本当にそうなのだろうか。むしろ今新たに、農業と農村に生きる人々を心身の底から呪縛し疎外し、物に落としめる傾向が露になり

つつあるのではないか。そして、「活性化」という呪文が乱発されるなかで、農業と農村は呪殺されようとしているのではないか。こうした危機的な状況のなかで、大切なこととして温め直されねばならないのは、「掛け替えのない自身の生涯を大切にしようとする意欲」、「価値ある物事は目新しいものの中だけではなく、坦々とした日常の繰り返しの中にもあるのだという理解」、そうしたことを了解し合った上で「掛け替えのない地域を創造しようとする態度」であろう。

そのための回路は二つある。一つは「人と人との係わり」を再認識すること、もう一つは「人と物との係わり」を再認識することである。行為論として見れば、前者に力点を置くのが演技的行為であり後者に力点を置くのが農的行為である。矛盾することなくむしろ互いに補完し合うはずの二つの行為群によって、人々はあらためて自己や地域のアイデンティティを発見できるはずである。

六 残された課題 ― 結びに代えて ―

考察の意義

抽象的な考察ではあるが、以上の議論は農業・農村が抱える現実的な問題に対しても示唆を及ぼしてくれる。

たとえば、産消提携、市民農園や農村型リゾートなどが注目されている。種々の効能が予期されていることであろうが、もしこれらに消費者による農業理解を期待するのであれば、消費者と農業者が共働できるような企画でなければならない。もちろんここで言う共働は広い意味でのものであり、あたかも甲斐甲斐しく立ち働く調理人とその脇で見惚れる客との間にさえ共働が成り立つように、身体的リズムが共有されることが

大切なのである。その意味では、消費者における車窓から風景を眺めレジャーランドで遊ぶだけの行楽や安全の一点だけにこだわっての産消提携、あるいは農業者における地域特産物を売らんかなだけの姿勢では不十分極まるだろう。

こうした現実的な主題への示唆もさることながら、行為論という特異な観点からの考察は、農学の展開において次のような意義を持つ。

一つは、農学者ならびに農をめぐる思潮が農への偏執(冒頭)に陥るのを、防げることである。

すなわち農学では、自然や社会の有機的な関係がトータルに視野に昇り、生存条件に直截に係わる「食料」「生命」「自然」などが主題とされる。こうした事情が手伝って、過分な思い入れや情念を農学から排除しきれない。しかしまた、農学は科学でなければならぬ。その思いが過剰なとき、思い入れや情念が排除され人間存在に関わる主題群の多くが削がれ、「生物資源学」として自己展開してゆくこともありうる。これはこれで偏執的であり、イデオロギー的でさえある。大切なのは、へ自然条件に多くを依存しつつ有機的な生産が展開され、生産が組み込まれつつ生活が展開される場^①が存在している、この事実^②に素朴に注目することである。そして、そこにどのような人生と生活の様式が展開しているかを見届けようとするのである。その結果、相対的にはあれ、他の仕事と暮らしの空間と異なるところが見い出されるならば、これを「農」と呼んだらいい。——このように自然体で構えればよいのではないだろうか。ちなみに、家事をも交えた行為群、手仕事が半ばを占める幾つかの他業種にも見られないとはいえない行為群を乱暴ながらも「農的行為」と総称したのは、こうした理由もあってのことである。

もう一つは、漸く近代農学の域を超えつつある農学の原論的な思潮に、

参画できることである。農学の一つの到達点は、「経済価値・生活価値・文化価値の総合的な実現」こそが農業・農村生活の目指すところであり、農学はそれに指針を与える」という理解である^③。システムの行為・農的行為・演技的行為に着目した小論は、行為論の観点からこれを基礎付けようとするものである。逆に、小論の行為論は「三価値の総合的な実現」という理論枠組みによって妥当性と可能性を保証される。もちろん、「価値」と「行為」の対応関係については、改めて吟味が必要とされることであるが。

残された課題

他方で、本稿には行き届かない箇所も多い。今後の考察課題として、以下に列挙しておく。

第一に、農業・農村生活の展開を支える諸行為として三ないし五タイプを挙げたが、これだけに尽きないのではないか。たとえば「ボランティア」や「生活設計」などは、行為として際立った特質を帯びる^④。これらが右の諸行為とどう係わり合うのか、検討を要するところである。また、農的行為の説明に際して、「定植」や「食事作り」という前向きイメージの行為にのみ言及した。掃除や修理、防除や除草などの必ずしも生命感昂揚的でない作業にも触れながら、よりトータルでバランスのよい考察を行なうべきではなかったか。

第二に、本稿の趣旨が、機械化・装置化や商品化の進展に逆行し趣味的な農業の称揚に向かっていないか。そうだとすれば、その理由の一つは小論の動機にある。それは、「農業が好きになった農業者」の主観の経緯を解明したい、農業者における農業観の醸成だけでなく消費者が農業に親近感をもつことの可能性を展望したい、さらには「仕事を通して

人が成熟し生きられる場が構築される」という仮説を設けてみたい^(一四)、ということであった。理由のもう一つは、議論の進め方に関わる。すなわち、農業は心身を挙げての自然との対峙であり、その限りで行為論的考察にとって機械化等の事実^(一五)は二次的なことがらだ、という前提が暗黙裡に置かれていたのは否めない。いずれにしても、機械・装置や商品経済取り引きの展開と心身の展開との関連について、従来の技術論などとは異なった視座から考察することが求められている^(一六)。

第三は、農業・農村生活における自然と人間との関係をどう理解するかである。——ここでは、自然的対象という客体と人間という主体との間の壁は直観により超えられ主客一致の境地に到達できる、と理解した。だが、安易に自然と人間の親和性を強調することは慎まねばならず、その意味で次の見解は銘記されてよい^(一七)。

「農業は、自然と人間の矛盾対立において営まれるものであり、人間同士の矛盾対立のなかで行なわれるものである。……もちろん、……、農業が自然の生命力を利用した物的生産である限り、その基盤において自然との調和は必須であり、また自然の猛威に対しそれを面的に利用する農業では地域における協同が不可欠である。」

「(少なくとも小学校高学年になったときは) 生命体同士の激しい争いの中で農業生産は行なわれるものであり、ほんとうの農民はそれをより高い次元で自然の摂理と調和させるべく苦闘しているのだ(ということ)を教えたものだ。……ムラやイエの中でのある意味で醜い争いが農業生産における連帯のなかで対立と緊張関係に転化していく(様子を中学生には見せたいものだ)。……(逆にいって、機械化と化学化のなかで進む自然破壊をなんら反省することのない農民たち、放っておいて荒らすのみだったのに

突如出てきたゴルフ場計画のおかげで政争と家庭争議に明け暮れている村人たちには、いかに美しい自然に囲まれていても農業の教育力を語る資格はない。)」

ここに記されているように自然と人間は対立の関係にあるが、人間の努力と苦闘のなかで、あたかも悍馬を御し御されるような調和であり小康の状態に到ることがある。手綱を握り続けつつ醍醐味が実感されているこの状態を主体の内側からみたとき、どうか。農的行為における諸々の感慨はこのときの様子であり、その意味でけっして無前提なものではないのである。

〔註〕

- (一) 生活世界に生きる人々が良質の対話を展開することによって思慮を培おう(J・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』(長谷川宏訳、紀伊國屋書店、一九七〇年)など)。予め決められているかのような美しさや快さの質にまるまる依りかかり支配されるのではなく、遊びと呼んでもいいような無心の対話によって美しさとか快さの質を主体的に創造しよう(G・E・ガダマー『真理と方法——I』(饗田収他訳、法政大学出版局、一九八六年)など)。日常生活のある部分を演技と捉えることによって、大衆消費社会とライフスタイルの将来を展望しよう(本文二を参照)。物事を主体視するのを控えることによって却って生活世界の真実相に迫ってゆく(「竹村牧男『はじめての禅』(講談社、一九八四年)など)。社会的な表出行為と心の深層との間に融通無碍な対流を保つことによって真の創造を取り戻そう(丸山圭三郎『言葉と無意識』(小学館、一九八七年)など。——これらの他にもさまざまな提案がなされている。
- (二) 拙稿『農業者の価値観の醸成に関する基礎的考察』(一九九三年)を参照のこと。

三) 同右。

四) 註一)を参照のこと。

五) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』(中央公論社、一九八四年)、同『演技する精神』(中央公論社、一九八八年)などを参照のこと。

六) 前掲・山崎『演技する精神』、二二・三頁。

七) H・ベルクソン『創造的進化』(真方敬道訳、岩波書店、一九七九年)、三九五・六頁、二二四頁、二四〇頁。

八) 市川浩『精神としての身体』(講談社、一九九二年)を参照のこと。

九) 重大な留保だが、企業的農業経営の経営主である佛田孝治氏(石川県野々市町)が言い当てた感慨には、この留保の妥当性がうかがえる。

「儲け主義なら農業でなくいい。以前に他産業(建築業)に従事していた自分も、そうだった。しかし、農業には収穫の喜びがある。愛着と言うか、いとおしさというか、稔りの感動がある。大工仕事でもそうだが、金銭は度外視だ。これが高く売れたら(感動は)もったい。農業のこんな良さは三十歳代の終わりになってわかる。」(筆者のヒアリングによる)

一〇) この可能性ないし蓋然性については、前掲・拙稿『農業者の価値観の醸成に関する基礎的考察』を参照のこと。

一一) その意味で、等身大の技術は大切である。この点については、E・F・シュマッハー『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学―』(小島慶三・酒井懋訳、講談社、一九八六年)を参照のこと。

一二) 祖田修『コメを考える』(岩波書店、一九八九年)、同『農林業にとって地域とは何か』(『農林業問題研究』第二六巻第四・五号、一九九〇年)などを参照のこと。

一三) 金子郁容『ボランティア―もう一つの情報化社会―』(岩波書店、一九九二年)などは、ボランティアを行為論の観点から考察してゆく上での示唆に富んでいる。

一四) 生活を維持するための人々の営みを「労働」と決め込んでしまうのではなく、遊戯性を帯びる「仕事」と捉え直してはどうかという提案は、示唆的

である。今村仁司『仕事』(弘文堂、一九八八年)を参照のこと。

一五) 機械を拒否することなくかつこれと批判的に付き合うための考察が、求められる。たとえば坂本賢三『機械の現象学』(岩波書店、一九七五年)には、そのための一つのスタンスが示唆されている。

一六) 吉田忠『農業の教育力―私の読み方―』(七戸長生・永田恵十郎・陣内義人『農業の教育力』、農山漁村文化協会、一九九〇年、三二・三四頁。